

敦煌と莫高窟

田 所 義 行

一九〇〇年といへば、中國では光緒帝の廿六年に當り日清戦後の經營に苦しんでゐた時である。そこへまた國粹黨の義和團騒動が起り、各國の聯合軍は北京を包圍し、清朝政府はまたまた各國に對して屈辱的講和條約を結ばなければならなかつた。それから後約十ヶ年、一九一一年十月に黃興等の起した南昌革命が成功し、宣統帝が退位するに至るまで、清朝政府は、内からは革命の狼火に、外からは各國の帝國主義侵略に、脅かされつづけてゐた。國家とか國民とか文化とかの上を考へる餘裕はなく、專制封建の君主としての命脉を保つことにのみ、あがきもがいてゐた。

さうした一九〇〇年に、山西の方面から流れ流れて來た道士の王圓籙なるものが、敦煌の洞窟に住みつき、やがて中國の學問、藝術の研究に偉大な貢獻を齎すやうな、一大發見の端緒が開かれたのである。

敦煌といふのは、燉煌とも墩煌とも書く。燉は火の盛んなるさま、墩は土を盛り上げた丘の意、煌はかがやきあきらかなさまであるが、この土地に何故かうした名前がつけられたか、その理由はわからない。砂漠地帯のオアシスで、炎暑のもとに人民のいこひの場所であつたことから、さう呼ばれたかも知れない。

この地の舊名は瓜州といひ、古代には羌戎とか月氏國とかの領地であつたが、中國の中世の初期に、匈奴が月氏國を破り、この地を領有してゐた。やがて漢の武帝の時に、霍去病の軍に匈奴は破られ、この地は漢の領土となつた。武帝は元鼎六年（BC一一一）に、ここに敦煌郡を置いた。

今日の敦煌は西北行政地区に屬し、甘肅省の西端、新疆省との境に近いところにある。敦煌から西北百五十キロ位のところに、府城の安西があり、安西の東南三百キロ位のところに酒泉がある。

酒泉とは、唐の酒豪の汝陽をして、俺を何故酒泉の太守にしてくれないかと、しやれを言はせたところである。杜甫（七一―七七〇）は「汝陽三年始朝天、道逢麴車口流涎、恨不移封向酒泉」と歌つてゐる。

安西から西北に向ふトラック街道は、新疆省に入り、吐魯番・迪化を経て蘇聯に通じ、赤都モスクヴァから中國への物資輸送の重要路となつてゐる。この吐魯番は、唐の太守の時には高昌といひ、安西都護府が置かれてあつた。迪化は清朝時代の新疆の省城で、新疆第一の都市である。

敦煌の西北十キロ位のところに、玉門關がある。布隆吉河の哈拉湖の西端にあつて、この玉門關を西へ越えると、新疆省の托格拉克泉に至る。唐代にはこれも西域への要衝であつて、李白（七〇―七六二）は「長安一片月、萬戶擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征」と歌つてゐる。この玉關といふのは、玉門關のことである。唐の時代には、戎狄の中國侵略を防衛するため、この玉門關のほとりに、中國の多數の軍兵が連年に亘つて遠征し、このほとりが故國の最後の駐屯地であつたであらう。

敦煌の西南二十キロ位のところには、陽關の古邑がある。ここもまた唐の時代に西域に通ずる要衝であつた。唐の王維（六九九

―七五九）は、友人の元結が當時西域の龜茲、今の新疆省の庫車にあつた安西都護府へ使したとき「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、歡君更盡一杯酒、西出陽關無故人」と歌つてゐる。その陽關とは、このことである。渭城の長安から、新疆省の庫車までは、日本で言へば北海道から九州までの距離であるから、當時の旅は大變なものであつたであらう。

今日新疆省へ甘肅省から通じる街路は、前の安西からの赤色ルートと、敦煌から湖南・獨山子・龍尾潭を経て、新疆省へ入るルートである。この街道は、年中雪の消えたことのない祁連山脉の麓に沿うて西へ西へと延び、崑崙山脉の南麓が塔里木盆地の砂漠地帯に降つて行かうとする境界のほとりを、且末・民豐・于闐・和闐・莎車・喀什等々の都邑を連ねて、中央亞細亞に抜け、歐州諸國に通じてゐる。これは往昔、中國の絹がラクダの隊商によつて、西域に輸送されて行つたシルク・ロードの迹である。今日ではこれは甘新公路と呼ばれ、新疆や西藏の鐵や石油を輸送する、トラック・ロードとなつて開けてゐる。

新疆省の塔里木盆地は、一名大戈壁とも呼ばれ、所々に草原地帯や不毛の土地をもつた一大砂漠地帯であるが、敦煌はこの大戈壁の東端に位するオアシスである。海拔一千五百米の高原の砂漠地帯の一中心で、空は紺碧に澄みわたり、空氣は清く乾いて、雨

は年に數度しか降らない。北緯四〇・四度、東經九四・七度の地點にある。人口は約九千、その大部分は漢民族であるが、その他に蒙古族・西藏族・回教族等が混じてゐる。附近には、綿・小麥・葡萄などを産し、これらの物資の集散地でもある。

この古風な異國情緒（この字の音はじようしよであつて、じようちよではない）豊かな敦煌の市街から東南へ約二十五キロ位離れた郊外に、三危山・鳴沙山といふ二つの砂山がある。鳴沙山とは、人馬がこの山に登つて行けば、踏みつける砂が希音を發するといふので、この名がある。三危山とは、三峰が聳え立ち、落ちかかりさうで危険に思はれるといふので、この名がある。舜帝が太古に三苗をここに流したといふ傳説もある。

この兩山の間の溪谷の、鳴沙山側の山麓に、三界寺といふ物古りた寺院がある。この三界寺の寺側の斷崖に沿うて、南北一・五キロ程の長さに亘つて、幾百もの石窟が、高層建築の窓のやうに開かれ、見ごとな景觀を呈してゐる。これを千佛洞といふ。今日發掘され整理されてゐる石窟の數は、四百八十程あつて、その洞窟には一つ一つ第何窟といふやうに、番号がつけてある。千佛洞といふのは、洞窟の數が非常に多いといふ意味で、必ずしも千あるといふのではない。また彫刻の佛像が安置してあるといふ意味から、莫高窟とも呼んでゐる。

この莫高窟とか千佛洞とか呼ばれる洞窟は、勿論一朝一夕に出來たものではない。一体いつ頃から、どれだけの日子を費して、開鑿されたものであらうか。唐の中宗といへば、則天武后の時であるが、その聖曆元年（六九八年）に建立の李氏重修の佛龕碑によれば、この千佛洞は東晋の廢帝奕の元年、すなはち前秦の建元二年（三六六年）に、修建されたとあるが、その時の樂僔窟といふのは、今日では明かでない。兎に角、東晋の時代にこれが存在してゐたことは明かである。今日洞窟内に残つてゐる壁畫などから考へてみると、その後六朝時代から隨・唐・五代・宋・元に至る十世紀の長きに亘つて、開鑿が續けられたものである。

これ等の數多い洞窟は、四方の壁から天井に至るまで、一面の壁畫でうづめられてゐる。しかもその壁畫が、十世紀の長きに亘つて、順次に造作せられたものであるから、その時代々々によつて、様式や趣向を異にしてゐる。題材もまた時代によつて異なるが、佛典をテーマにしたものが多数で、その他に各時代の風俗や民間信仰や傳説故事などを描いたものもある。時代の古い北魏のものは、太くたくましい線、鮮明な輪郭をもつて、素朴であるが、西魏時代のものになると、美しい形の裝飾が施され、線も繊細になつてゐる。隋時代になると、繪具の色が暗綠色を帶び、唐代のものは、美しい朱色の優雅な線が、中国の封建文化の極盛を想は

せ、宋代のものになると、また異つた調子を出してゐる。

この壁畫を通じて、中國への西歐文化の影響が、色濃く見られるのも面白いことである。それと同時にまた、中世のシルク・ロードを通じて、中國の文化が西洋にも流出し、西歐の文化にも種の影響を及ぼし、ローマ帝國以來の西洋の文明の發達に、寄與貢獻したであらうことが、想像される。

千佛洞の地殻は、氷河期に出來た沖積層であるから、水成岩質のもろいものである。従つて彫刻には適しないが、それでも相當数の彫刻もある。この彫刻には、佛像が壓倒的に多い。

中國の中世の文化が、わが國の古代の飛鳥・奈良・平安の文化に、重大切實な影響を及ぼしてゐることは言ふまでもない。今日それを、この千佛洞の壁畫によつて實證することが出来るものがあると思ふ。

奈良の正倉院の大唐勤政樓前觀樂圖の屏風は、千佛洞の壁畫の大樓閣前で馬上の天子に禮装した群臣が扈從し、甲冑に身を堅め矛盾を手にした武士十人が、舞伎を演じてゐる場面と、關聯があるのではないかと、原田淑人氏は言つてゐる。東大寺の戒壇院の多聞天の原型とも思はれるやうな佛像もあり、正倉院の樹下美人の繪畫や因果經の山上や樹木や青綠山水の大和繪調のものもあり、日本人になつかしい古い日本畫の様式が、多く含まれてゐると、

福田豐四郎氏は言つてゐる。また第三二一窟にある飛天の如きは、法隆寺の金堂の小壁畫の童形飛天と酷似してゐる。

敦煌の千佛洞には、このやうにすばらしい壁畫や彫刻が藏せられてゐると共に、千萬卷の佛典や古文書類が保存されてゐた。元來この地は、海拔千五百米のしかも高燥地であるから、古文書や佛典の保存が出來たのである。日本のやうな濕氣の多いところでは、虫害や濕害のために書物の保存は容易ではないが、かうした高燥な土地なればこそ、保存がきく。丁寧に保存するといふのではなく、ただ自然のままに放置しておいても、なかなか損傷することはない。ここに保存されてゐた佛典や古文書類も、意識的に大切に注意深く保存されたものではなく、恐らくただ洞窟の中に積みこみ、自然に忘れられ、放置されてゐたまでである。

どうして、何の故に、この千佛洞に佛典や古文書類が、多數に保存されたかは明かでないが、ここは東西交通の要衝であり、ここに東西の旅行者が足をとどめたであらうから、勢東西の文化がこの地を中心として、交通したためであらう。また中國の中原の幾多の戰禍を避けて、この地に僧侶や知識人が、書物をもつて避難疎開して來て、ここにその書物を留めたといふこともあらう。前述のやうにこの千佛洞は、六朝時代から元の時代まで、十世紀に亘つて掘り續けられたが、その後さつぱり開鑿されることな

く、そればかりこの敦煌にかうした素晴らしい千佛洞の存在することすら、中國人から忘れ去られてゐた。その理由はなぜかと言へば、明代になつて海上からの東西交通が開け、陸路シルク・ロードによる東西交通はさびれはて、東西の旅行者のこの地を宿場として利用するものもなく、千佛洞の存在がいつの間にか中國人の耳目から遠ざかり、ただこの地方人の俗信を支へる寒寺となつてゐたからである。

それに加へて、元來この千佛洞のほとりの砂丘は、強風に煽られると砂が風のまにまに吹き寄せられ、一夕にして山をなす場合があり、必要とあればどうしても掘りかへさなければならぬが、一度世人から忘れかけた千佛洞であり、それが住民の現實生活に直接關係が無いものであつてみれば、發掘もされずじまひに、そのまま世人から忘れ果てられたことであらう。

かうして中國人から忘れられてゐること、明から清末へかけて五百數十年、六世紀の長きに及び、やがて一九〇〇年に前述の王圓籙なる貧しい無學の田舎道士に見出された。彼は千佛洞の一角にある荒廢した三界寺に住みつき、寺を修理してゐて、偶然壁の破壊したところから、千萬の古文書や經典などの蔵せられてゐることを發見した。彼はただ驚異の眼を見張るばかりで、それが如何なる古文書であるかを鑑定することが出来なかつた。

兎に角それがただものではない、何かいはれのある古いものであらうと位の想像はついたであらう。彼はそのうちの數部を見本として、事の由を蘭州の總督に申し出て指示を仰いだ。ところが當時の中國の清朝政府の役人たちは、殊にそれが地方官などであつてみれば、王道士と同様の無學もので、學問のある奴などはない。そんな金儲けになりさうにない、反古同様の古文書や古經典などには、目をくれるほどの暇はなかつた。そのまま放置せよ、とのことで王圓籙は、自分にもまた用のないものと、もとのままにして闇の洞窟の中に藏しておいた。しかし彼は、わけはわからないながらに、これを何か大切な佛の奇跡とでも考へ、またさう吹張し、信仰の手段にすることを忘れなかつた。

ところが一九〇七年の五月に、もとハンガリーの生れで、のちに歸化して英國人となつてゐるエム・オーレル・スタイン（一八六二—一九四二）（蘇坦因とも史泰英とも書く）といふ探險家が、この敦煌の町に現れた。スタインはこれよりさき、一九〇二年にも、新疆のシルク・ロードの宿場であつた和闐を探險したことがあつて、これは二度目の新疆探險の途次であつた。スタインが、新疆探險に出かけたのには、わけがあつた。

一八九〇年頃、歐洲の各國は中國の清朝政府の政治力の貧弱なものに乘じ、盛んに新疆方面の探險を試みるといふ風習が流行した。

英國のバワー大尉が、印度總督の命令で、新疆の庫車を調査し、梵文の貝葉形の古經文を發見したのを手はじめに、歐洲の東洋學者たちが一せいに騒ぎだした。英・佛・獨・露は互に競争して、探險隊を派遣した。

一九〇七年は、日露戰爭の翌々年である。スタインは印度總督の保護の下に、中国人の蔣孝琬を秘書とし、寫眞測量技師のナイクと外に下僕二人を伴れ、初夏の砂漠をとぼとぼと、馬や駱駝の背にゆられ、夕暮時に敦煌の郊外に辿り着いた。そこに天幕を張り、目的地に到着した喜びと、明日の探險の希望に胸ふくらませ、葡萄の美酒を夜光の杯に受け、一同と共に乾杯した。

翌日は敦煌の役所に知縣を訪ねて挨拶し、これも先づ上々の首尾であつたが、未知の土地での探險は先づ土人からの聞きこみが大事と、スタインは耳を針のやうにしてゐた。果して彼は、この地に流れて來てゐるトルコ商人から、千佛洞に古い經典が山のやうに蔵はれてあることを、小耳にした。彼の神經は急に緊張したが、しめたと思ふ心を顔色には出さなかつた。

早速千佛洞を探つてみると、成るほどこれは大したすばらしさである、彼は知つた。彼は先づ寫眞技師と共に、驚異の眼を見張り感嘆の声を發しながら、洞窟内の壁畫や彫刻をカメラに収めた。王圓籙といふ道士が、寺に住んでゐるといふこともわかつた

ので、秘書の蔣孝琬をつれて王道士に挨拶に出かけた。

スタインはこの時早くも、王道士が無學の田舎坊主であることを見抜き、その後腹心の秘書蔣孝琬に胸をふくめ、うまいこと王道士をまるめこみ、折衝數回、紆餘曲折の後に、西藏經典五包と漢文經典五十包とを、大型馬蹄銀四個で交換した。これを梱包して、スタインは一度安西方面に移動したが、それから四ヶ月目に再び空箱を用意して、千佛洞の王道士の前に現れた。そこでまたしても二百包の古文書類をせしめとつてしまつた。小心者の王道士は、佛罰を恐れたり、また信仰厚いツアイダムの王が年に一度はここに參詣し、この書庫に禮拜してゐたので、これが減少しては大變だと、容易に承知しなかつたが、三藏法師を佛縁などと、うまいこと王道士を口説きつけた。

結局前のものと合せて、二十九箱の美術品や古文書・經典類を、駝背につけてスタインは、秋風の中を意氣揚々と引きあげて行つた。やがてそれ等の貴重な資料は、大英博物館に收められた。スタインのこの時の成果は、それから十三年の後に、「セリンディア」といふ五冊の老大な書物となつて報告された。これは歐洲の東洋學界を驚かせたばかりか、世界の學界をあつと言はせた。

このスタインより約一年程遅れて、佛蘭西の東洋學者パウル・ペリオ（一八七八—一九四五）（伯希和と書く）が、敦煌に現れ

た。ペリオは佛領印度支那のハノイに生れ、ハノイ東洋学院を卒業し、一九〇〇年の義和團事件の當時は、北京に留学してゐた。

彼も劍銃をとつて、各國の公使館員や留學生たちと共に、死地をきり抜けた一人である。従つて中國の學問にも深い造詣があり、また中國語もお手のものであつた。さきのスタインは、全然中國語を解せず、漢文は讀めもしなかつたので、王道士との外交交渉は、すべて腹心の秘書蔣孝琬にやらせてゐたが、ペリオはその點全然スタインとは違つてゐた。

ペリオは、一九〇六年六月に、中央亞細亞探險隊長として、ヴェイヤンやノウエット等の隊員と共に、パリを出發した。これはスタインが、印度を出發した一九〇六年五月より、ただ一ヶ月しか遅れてゐなかつた。スタインがシルク・ロードに出て大戈壁の砂漠の北邊に添うて、一路敦煌目指して行進してゐたとき、ペリオの一隊はモスクヴァを經由してカシコガル・トムスクと悠々探險の旅を續けてゐた。翌一九〇七年の正月に、ペリオは漸々大戈壁の砂漠の南側の天山山脉の麓にある庫車の町に到着した。ここでキジールの千佛洞といふのを探險するのに數ヶ月を費してゐる。やがて庫車から東北上して、新疆の主都迪化に出で、ここで土族の王に盛んに歡待されたが、その招宴の席上で敦煌の話が出た。その話によれば、英國の探險隊がすでに敦煌に乗りこみ、古文書

などを大分手に入れたとの噂であつた。ペリオはかねてスタインのことは知つてゐたから、はつと胸をつかれて一時はしまつたと思つたが、やがて思ひ直して、スタインには漢籍のことはわからぬ、いくら彼が持つて行つたとしても、吃度見残しがあるにきまつてゐる、今までの探險でも隨分人々の後を廻つて、立派なものを探し出してゐるのだと、心を落着けた。かうなつたら、さう急ぐことはない、それから吐魯番や喀密などの新疆の古城市を次次探險をつづけ、一九〇八年の二月に敦煌に足を踏み入れた。

ペリオは千佛洞の王道士に向つて、残つてゐる古文書類全部を買取りたいと交渉した。スタインが前にもかういふ相談を持ちかけて失敗したことがあるが、この度もまた王道士は、それは困る、絶対に駄目だと、頭を横にふつて應じなかつた。そこで色々折衝の末、ペリオが欲しいと思ふものを、自分で選擇させて貰ふことになつた。ペリオはもともと漢文には堪能であるから、薄暗い書庫内に入り、蠟燭の光の下で、いまだに山と積まれてある古文書類を、片つぱしから讀破して、これはと目星しいものを選び出した。人間わざとも思はれないやうな超スピードで、萬巻の古文書を十日餘りで、あらかた目を通し、四千數百巻の古文書類を買取つてしまつた。

ペリオの得意や思ふべしである。彼はその貴重な資料をもつて、

直ちに西へは歸らないで、なほあたりの探險をつづけ、五月の末に敦煌を立ち、安西に出で、シルク・ロードを東に向ひ、酒泉・武威・蘭洲へと東下し、唐の古都の長安、當時の西安に遊び、日數重ねて河南省の鄭州に出で、そこから汽車に乗り、一昔前に遊んだことのあるなつかしの都北京に到着いたのが十月の初めであつた。

まだ青年氣鋭のペリオは、ここで中國の老學者たちの鼻をあかしてやらうと思つたのか、彼は佛蘭西公使と相談の上、持参した敦煌古文書の一部を出して、六國飯店ホテルで公開展覽に供し、一席の探險報告演説をぶつたのである。清朝政府がいくら學問や文化を打忘れてゐたと言つても、清朝に忠勸をぬきんでる北京の老學者たちが、この寢耳に水の報告を聞かされ、現物を目の前に見せつけられては、あつと言つてたまげないではゐられなかつた。いくらか氣慨のある者たちは、この黄口兒がと、切齒扼腕したことであらう。その一人は一九一一年の革命と共に、北京から日本に亡命して、京都大學の講師などしてゐた羅振玉（一八六六―一九四〇）であつた。

ペリオの持ち來した古文書類は、やがて海路西に運ばれて、無事に巴里國立博物館に收められたが、ペリオはそれより前北京でこの古文書の一部を寫眞版にして、うらめしさうに指をくはへて

ゐた北京の學者たちに、凱旋將軍のやうな氣持で贈つてやつた。この貴重な中國の學問文化の國寶が、天津・南京と中國人の目にさらされながら、大手をふつて佛蘭西へと運ばれて行くのを見ながら、清朝政府はこれを何ともしようとは考へなかつたし、また清朝の學者たちもこれを何ともする力がなかつた。

前のスタインの業績といひ、またペリオの收穫といひ、歐洲の東洋學界を騒がせ、シノロギー熱をいやが上に盛上らせた。そのさまを見て清朝の學者たちは、黙つてゐることが出来なくなり、スタインやペリオに持去られたものは已むを得ないとしても、せめてその殘部は中國に確保しなければと、清朝政府に嘆願し、政府もまたこれに動かされて、千佛洞の古文書の残りの全部を北京に回送させることにした。蘭州の總督にこれが回送方が命ぜられた。その結果、王道士は國寶を勝手に外國人に賣却したかどで、死罪に處せられるといふことになつた。ところが無學ではあるが奸智にたけた坊主だけあつて、かれはかねてスタインやペリオから受取つた大型馬蹄銀の大部分を、それぞれの役人たちにつかつて、うまく死罪をまぬがれた。一方北京圖書館に送り届けられた古文書類は約六千卷。もつと澤山あつた筈だが、王道士は一部はかくしもしたし、また當時の中國であつてみれば、北京への道々、ずるい商人や官僚たちに、行李から抜かれもしたであらう。

當時日本の橋瑞超青年が、大谷光瑞の後援で、五ヶ年間の長きに亘つて新疆方面の探險を行ひ、一九一一年に敦煌に出で、ここで別動隊の同志吉川小一郎青年と落合ひ、王道士が北京へ回送せずにかくしてあつた古經典を二・三百部程を手に入れ、一九二一年に日本に持ち歸つた。これは特筆すべきことであらう。

ところが、一九一四年になつて、さきのスタインがまたまた敦煌にやつて來て千佛洞に現れた。王道士がひそにかくしもつてゐた古文書類を、五箱も持ち去つた。

因にスタインは、この敦煌の千佛洞探險の功によつて、英國王からサーの位を授けられ、ペリオもまた巴里大學教授の地位を獲得した。

さてさうすると、この敦煌の千佛洞から世に出た成果はどんなものであつたであらう。これを要約すると、前にすでに述べて來た十世紀の長きに亘り描きつがれた壁画や彫りつづけられた彫刻と古寫經・古文書類とである。壁畫や彫刻については、前に述べたが、その古文書類はどんなものがあつたであらう。これもまた實に多種多様に亘つてゐて、中國の學問の縮圖のやうなものである。しかもその中には、古書としても未だ見ることの出來なかつた珍奇なものが多數出て來た。さうした古文書類を類別すると次のやうになる。

まづ第一には、中國の古佚書の發見されたことである。これも經學・思想・文學の面に亘つてゐる。

その二は、西域やトルコ地方の古語が明かにされたことである。

その三は、佛教・景教・摩尼教等々の古の宗教の經典が明かにされたことである。

その四は、漢魏六朝時代の本簡や肉筆の法帖の發見されたことである。

その五は、西域地方の建築様式の明かにされたことである。これは壁畫からも見られる。

その六は、中國の白話小説・俗曲・俗文・變文等の資料が發見されたことである。殊に白話小説の發見によつて、從來その起原を明かにすることが出來なかつた、中國の白話小説の起原を明かにすることが出來た。ここで發見された白話小説は唐太宗入冥記・秋胡小説・茶酒論の如きもの、俗曲とは嘆五更・孟姜女の如きもの、俗文とは八相成道經俗文・維摩經俗文等の如きもの、變文とは舜子至孝變文・大目乾連冥間救母變文の如きものである。

明時代から世人に忘れられてゐたこの敦煌の千佛洞も、一九〇七年に歐洲人によつて再び世に出されたが、その後中國政府がこの千佛洞に直接手を下すことになつたのは、一九四一年のことである。當時の國民政府は、四・五人の役人を遣して、この千佛洞

の研究に當らせたが、ほとんどその実績はあがらなかった。僅かに洞窟を保存するといふ位のことであつた。しかも一九四五年に、第二次世界大戦の終つた時には、國民政府はこの貧弱な研究所さへ閉鎖してしまつた。しかし、こんな役人たちは感心にも、國民政府の閉鎖命令には従はないで、自力でこつこつと研究をつづけてゐた。

一九四九年九月に、中共の解放軍によつて、敦煌も解放された。中共政府は專制封建の清朝政府や、ブルジョア民主主義の國民政府とは違ひ、千佛洞に残された古典的藝術の遺産を甚だ重要視し、一九五一年には新しい敦煌文物研究所を設立した。今日では五十人程の所員が洞窟の修理保全に、また壁畫の修復・模寫・研究に、孜々として従事してゐる。研究所の所長は常書鴻といふ。

参考文献

常書鴻・中國敦煌藝術展日本開催に寄せる
毎日新聞・敦煌とその藝術
石濱純太郎・敦煌石室の遺書
スタイン・セーリンディア
上原芳太郎・新西域記
羽田亨・西域文明史概論

松岡讓・敦煌物語

(本學教授)

羽溪了諦・西域の佛教

堀謙徳・解説大唐西域記

深澤正策・マルコポーロ旅行記

橘瑞超・中亞探検

吉川小一郎・支那紀行

那波利貞・千佛巖莫高窟と敦煌文書

仁井田陞・唐末五代の敦煌寺院佃戸關係文書

塚本善隆・敦煌佛教史概説

龍谷大學所藏・敦煌古經現存目錄

西域文化研究所編・敦煌佛教資料

足立喜六・大唐西域求法高僧傳

向達・唐代長安與西域文明

桑原隲藏・東西交通史論叢

白鳥庫吉・西域史研究

矢吹慶輝・鳴沙餘韻

松本榮一・敦煌畫の研究

石田幹之助・中央亞細亞探險の經過とその成果

石田幹之助・長春の春